

2001 (平成13)年度

鈴木研究室卒業論文

発表報告会 2002年1月19日(土) 13:30~

9 249 教室にて

- A 9819004 福田浩章 「映画館を取り巻くメディア環境
メディアとしての映画館、その特徴と意義を考える」
- A 9819012 飯ヶ谷航太
「グローバルと新情報秩序 第三世界の視点から情報流通問題を考える」
- A 9819016 上村麗花 「在日外国人とエスニック・メディア」
- A 9819021 小泉光哉 「新聞の将来予想 30年後の新聞」
- A 9819030 松本亜夕美 「インターネットに登場したニュース
テレビや新聞におけるニュースの比較から」
- A 9819045 三枝アキ 「女性週刊誌における皇室報道
ジェンダーの視点からみる」
- A 9819069 和田ひとみ 「外国メディアにみる日本のイメージ
タイのメディアは日本をどう伝えているか」
- A 9819072 山下康幸 「メディアとプロレス」

映画館を取り巻くメディア環境

メディアとしての映画館、その特徴と意義を考える

A9819004 福田 浩章

はじめに

第一章 映画の歴史

第一節 映画の発明

第二節 映画スタイルの確立

第三節 日本映画産業の成立

第二章 文化産業としての映画館

第一節 文化と文化産業

第二節 映画館と競合するメディア

第三節 文化産業の中の映画

第三章 映画産業の現状と分析

第一節 現代日本の映画産業システム

第二節 ミニシアター・シネマコンプレックスとは

第三節 映画館数の推移

第四節 ミニシアター・シネマコンプレックスが果たした役割

第四章 映画館の行方

第一節 地域格差の中で

第二節 文化産業として発展するために

おわりに

映画は科学技術の発展と共に、娯楽、新しい芸術として成長してきた。映画産業も一大産業のひとつとして華々しい世界を作り上げた。だが、それもテレビの登場によって影をひそめることとなる。ところが現在、長年の間斜陽産業といわれ続けた映画産業にとって、映画館が増えているという明るいニュースが騒がれている。しかし次々と新しいメディアが登場し、家庭で気軽に、好条件で映画を鑑賞できるようになっている現在、映画を鑑賞できる場所は映画館だけではなく、むしろ新メディアによる需要のほうが高くなっているといえる。では、なぜいま映画館が増えているのか。そして、これからの将来映画館が存在する意義はあるのだろうか。

第一章では、映画が文化として成立するまでの背景を知るために、映画の技術的発展と、映画が大衆文化として成立する過程。そして日本における映画産業史をまとめた。

第二章では、文化産業の概念、鑑賞レジャー産業の具体例として博物館産業の現状とその問題点をみた。これをきっかけとし、鑑賞レジャーとしての映画館を捉え、また映画館と他メディアでの映画鑑賞意義の比較を試みた。

第三章では、現代日本映画産業の現状、産業構造をみた。新しい映画館の形であるミニシアターとシネマコンプレックスの果たした役割を考えつつ、その具体的な数値から映画産業の問題点を分析した。

第四章では、映画産業における地域格差の問題、それに関連する動きから、本論のまとめとして映画館の未来について一考察を試みた。

主要参考文献

岡田裕『映画 創造のビジネス』筑摩書房、1991年。

- 佐野眞一『日本映画は、いま - スクリーンの裏側からの証言』TBS ブリタニカ、1996 年。
 Monaco James, HOW TO READ A FILM(1981)
 岩本憲児 内山一樹 杉山照夫 宮本高晴 訳『映画の教科書』フィルムアート社、1983 年。
 田村紀雄『「在宅化」社会：ビジネスが変わる・生活が変わる』ダイヤモンド社、1992 年。
 庄林二三雄『日本の文化産業 - 和魂洋才の日本的商法』有斐閣選書、1981 年。
 Sadoul Georges, *Histoire du Cinema Mondia* (Paris :Librairie ERNEST FLAMMARION, 1972) .丸尾定 訳『世界映画史』みすず書房、1980 年。
 四方田犬彦『日本映画史 100 年』集英社、2000 年。
 松原隆一郎『豊かさの文化経済学』丸善ライブラリー、1993 年。
 中村浩『博物館学で何がわかるか』芙蓉書房出版、1999 年。
 岡田晋『映像学・序説 - 写真・映画・テレビ・眼に見えるもの』九州大学出版会、1981 年。
 山内直人『NPO 入門』日本経済新聞社、1999 年。
 山岸秀雄 編『アメリカの NPO - 日本社会へのメッセージ』第一書林、2000 年。

グローバル化と新情報秩序

第三世界の視点から情報流通問題を考える

A9819012 飯ヶ谷航太

はじめに

第 1 章 巨大メディアの発展とその背景

第 1 節 通信社の成立とその背景

第 2 節 メディア国際化の促進要因

第 3 節 メディア・グローバル化の現状

第 2 章 情報寡占とその問題

第 1 節 第三世界の覚醒

第 2 節 1970 年代に始まる議論

第 3 節 新たな時代の課題

第 3 章 コミュニケーション能力の向上

第 1 節 第三世界間の情報供給体制から

第 2 節 国際支援の見地から

第 3 節 アジアのメディア発展から

第 4 章 まとめ

第 1 節 現在における「新情報秩序」の流れ

第 2 節 考察

おわりに

参考文献

現在、われわれの獲得する情報のうち、どのくらいが第三世界側からのものなのだろうか。世界の情報の 8 割を供給するのは、先進諸国の国際通信社という指摘があるように、われわれが第三世界の編集による、第三世界の主張を見ることはほとんどない。

本論の目的は、情報流通の不均衡が議論として持ち上がった 1970 年代から現在までの約

30 年間にスポットをあて、情報流通の不均衡をひきおこす原因とその問題点を確認し、第三世界の視点に立ったときにこの問題に対してどのような解決策を導くことが出来るのかを考察することである。

第 1 章では、国際情報流通において、情報を独占してきた西側の巨大メディアに焦点を当てる。

第 2 章では、国際的な情報流通における不均衡に対し、第三世界が異議を唱えた一連の過程と背景、そこにあった問題点を述べ、さらに、メディア・グローバルイゼーションが進む現在の、情報流通における不均衡の問題が複雑化している様子を示した。そして、複雑化したこの問題を考える上でのひとつの視点として、第三世界の「自主的コミュニケーション能力」の向上が有効であると導き出す。

第 3 章において、第三世界の自主的コミュニケーション能力向上のために必要な要素が何であるかを探っていく。新情報秩序論争以降の第三世界間やユネスコでなされた試みや、マス・メディアの普及が著しく伸びているアジア地域を見て、コミュニケーション能力向上のためには国家レベルでは何が必要なのかを探る。

第 4 章では、まず現在の新情報秩序論の方向性を確認する。そして、前章で取り上げた、第三世界の自主的コミュニケーション能力の向上に必要なと思われる要素と現在の新情報秩序論を踏まえて、情報流通の不均衡を解消するための考察を行う。

主要参考文献

- ・アンソニー・スミス (小糸忠吾訳) 『情報の地政学』 (TBS ブリタニカ、1982 年)
- ・石坂悦男、ほか (編) 『メディアと情報化の現在』 (日本評論社、1993 年)
- ・桂敬一 『日本の情報化とジャーナリズム』 (日本評論社、1995 年)
- ・ジョナサン・フェンビー (小糸忠吾[ほか]共訳) 『国際報道の裏表』 (新聞通信調査会、1988 年)
- ・H. H. フレデリック (川端末人 武市英雄 小林登志生訳) 『グローバル・コミュニケーション - 新世界秩序を迎えたメディアの挑戦 - 』 (松柏社、1996 年)
- ・門奈直樹 「グローバル・メディアと文化帝国主義」 井上俊、ほか (編) 『メディアと情報化の社会学』 (岩波書店、岩波講座・現代社会学第 22 巻、1996 年)

在日外国人とエスニック・メディア

A9819016 上村麗花

シアトルのダウンタウンに位置するチャイナタウンにある紀伊国屋書店には日本食材のスーパーも隣接し、シアトル近郊に住む日本人や日本に興味のあるアメリカ人でにぎわっている。店内には日本の約 1.5 倍で食材、本、雑誌、文房具などが売られている。出口の近くに行くと、無料で日本語の新聞が置かれている。高校時代、シアトルで過ごした筆者にとって、この新聞はたまに読む日本語の新聞で紀伊国屋に行く度についで持って帰っていた。新聞とは名ばかりで、これはいわゆる情報紙であった。シアトル近郊で活躍する日本人の紹介、仕事や家案内、レストランや病院の広告がメインである。購読する、というよりは買い物ついでに情報をもらう、という感覚で日本の情報を手に入れることを楽しみにしていた。隣の中華レストランに行けば、中国語のエスニック新聞が目に入る。

移民国家アメリカにおいて、Little Tokyo と呼ばれる日本人町は大都市であるニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルスを中心に全国 10 カ所に及ぶ。日本人町以外に

も China Town と呼ばれる中華街、Little Italy と呼ばれるイタリア人町などアメリカにはそれぞれの民族がエスニックコミュニティを持っている。そしてそこが彼らの食生活、冠婚葬祭、娯楽、教育、信仰の中心となっているといっても過言ではない。

日本にも横浜中華街、新大久保にある韓国人集中地帯を始め、各地域にエスニックコミュニティが存在する。彼らは大きく 2 つのグループに分かれる。ひとつは第二次世界大戦中に強制連行され、日本を生活の基盤にせざるを得なかった朝鮮、韓国人や台湾人などの永住者やその子孫たちであり、もうひとつは日本に仕事や留学、結婚などの理由で来たニューカマーたちである。

日本にはすでにエスニックメディアが存在しており、それらが日本に住む外国人にとってどのような存在であり、どのような働きをなされているのかを調査したい。筆者はエスニックメディアがあることによって、シアトル近郊、特に日本人に関係するイベントなどを知る手口となった。仕事や家探しは個人的には利用しなかったが、留学などで個人的に外国にいる人にとって、アパートや仕事情報が記載されているエスニックメディアは心強いに違いない。

本論文では、第一章に在日外国人の歴史と日本で暮らすためには絶対必要な外国人登録証について。また現在の外国人の人口とどのように増えているかを分析した。第二ではエスニックメディアの定義、社会的機能など、エスニックメディア自体の分析である。既存の創刊年やそれぞれの言語の発行数などエスニックメディアの細かいところまで述べる。第三章では『ひらがなタイムズ』を発行しているヤック企画と中国語、フィリピン語、マレー語、インドネシア語、ミャンマー語、ベトナム語の 6 紙のエスニックメディアを発行しているニューコム現場で働く編集者たちのインタビューを試み、送り手側の意見を伺った。第四章で 20 歳以上の在日外国人にアンケート調査を行い、受け手としてのエスニックメディアの存在について考察し、筆者の考えるエスニックメディアの今後と課題を述べる。

はじめに

第一章 在日外国人

第一節 外国人移民の歴史

第二節 外国人登録証

第三節 現在の外国人の状況

第二章 エスニックメディアとは

第一節 エスニックメディアの定義

第二節 エスニックメディアの社会的機能

第三節 既存のエスニックメディア

第三章 発行者側の立場から

第一節 株式会社ニューコム

第二節 ひらがなタイムズ

第四章 これからのエスニックメディア

第一節 アンケート調査にみるエスニックメディアの役割

第二節 筆者の考えるエスニックメディアの今後

おわりに

主要参考文献

白水繁彦『コミュニケーションと文化変動』(白桃書房、1988年)

白水繁彦『エスニック・メディアー多文化社会日本を目指して』(明石書店、1996年)

白水繁彦『エスニック文化の社会学コミュニティ・リーダー・メディア』（日本評論社 1998年）

森口秀志・江崎泰子編『「在日」外国人 35カ国100人が語る「日本と私」』（晶文社、1988年）

森口秀志『エスニックメディアガイド』（ジャパンマシニスト社、1997年）

<ウェブページ>

www.bekouame.ne.jp/i/jl0301

www.hiraganatimes.com

www.newcom.or.jp

www.seaple.icc.ne.jp/~sshige/

www.asahi-net.or.jp/~cj7h-mrgc/EMG/

www.weekender.co.jp/

新聞の将来予想 30年後の新聞

A9819021 小泉光哉

朝 YAHOO! ニュースでヘッドラインをチェックし、大きなニュースの有無を確認、そこで興味あるニュースがあまりなければそそくさと準備をして出かける...これが一日のはじまりである。新聞はもちろん読むが、満員電車の中、なかなか堂々と読めるものではない。気になった記事以外までは目が回らないことが多い。一日のその後に時間があればいいが、なければ読まずに次の日へと進んでしまう。また、筆者は親が新聞の購読料を払ってくれているからいいようなもので、友人の中には、購読料もいらず、情報が新しいインターネットだけで済ます、という人も実際にいる。

新聞はなくなる、斜陽産業だ、若者の新聞離れ、それらが言われるようになって随分長い時間が経った。新聞は大丈夫なのだろうか、インターネットを誰もが見るようになり、移動中も手軽にチェックできるようになったら、新聞が紙である必要などないのではないか。そう漠然と感じていたのが、卒業論文にこのテーマを選んだ契機になった。

さらにメディアの巨大化。日本の新聞が外資に買収されたら、新聞業界はどうなってしまふのか。イギリスでそうだったように、ゼロサムゲームとでも言うべき安売り合戦が起こってしまったら、ジャーナリズムの質はどうなるのだろうか。倒産する新聞社がでて、読者が考え方を作る選択肢が減ってしまうかもしれない。

この論文では新聞とインターネットニュース（電子新聞）の未来を予想するとともに、新聞が生き残るためにどうあるべきかの提言を行いたい。基本的スタンスとして、ジャーナリズムの質と言う観点から、新聞はなくなる、という考え方がある。テレビが登場した時も新聞の将来が危ぶまれたが生き残ってきた。ジャーナリズムと呼べるものは新聞しかなかったからだと思う。

副題に30年後の新聞としたが、30年後というのはテレビが普及した東京オリンピックの1964年、それから約30年経った1995年にWINDOWS95が爆発的に普及し、現在に至っている。そのため、メディアの生態系を考えるにあたって、当面は新聞とインターネットその生存競争が議論になるだろうが、30年以上先は全く新しいメディアまたは概念が登場している可能性がある、と考え30年後に設定した。

メディアの将来を考える際に、とすれば「技術はメディアをどう変えるか」という「技

術決定論」の発想に陥りがちだ。しかし社会は技術を丸のまま受け入れるのではなく、適切なものだけを選択したり、都合よく変形したりして受け入れるものだ。だからこそ「新聞の特質を生かすにはどうするか」「電子メディアとの相互補完の関係を保つにはどうすればいいか」というように、道を切り開こうとする姿勢を持つことが必要だ。インターネットを使う画期的な技術が登場したから将来の新聞はこうなる、という論理の立て方は少々乱暴である。この論理の先の片方には、電子メディアが無条件に普及して、紙の新聞はなくなるという技術楽観論があり、もう一方には、いや新聞の伝統は絶対に永遠というマスコミ楽観論がある。だが、そのような信念よりも、人々が潜在的に望んでいる新たな情報サービスをいかに提供できるのかを検討する方がもっと大事だろう。

それはテクノロジーを使う人間の工夫によるのだから、今ある技術の組み合わせでも、もっとおもしろく、有益な情報サービスを開発できるはずである。それができないのは技術の問題ではなく、社会の固定的な制度や組織のありようの問題である場合が多い。

ただ、未来を予想するというのは非常に難しい作業であるのは、1960年代から70年代にかけての「未来予測ブーム」に行われた研究からも明らかである。本当に多くの要因があり、それを全て分析した上で結論を出すには、科学や社会構造、環境の変化、その他あらゆる研究をしなければならない。

1章、2章は電子新聞、新聞の現状と両者の比較を行い、3章では新聞が生き残っていくための課題、提言、4章で紙媒体の行方、新聞を脅かす存在の考察、科学者やジャーナリストたちの未来予想を紹介した上で、30年後、どうなっているかの結論を出したいと考えている。

はじめに

第1章 電子新聞

第1節 電子新聞とは何か

第2節 紙の新聞との違い～電子新聞の特徴

第3節 電子新聞へのニーズ

第2章 新聞

第1節 新聞経営の現状

第3章 多メディア時代の新聞～新聞はどうあるべきか

第1節 多メディア時代の新聞経営

第2節 経営戦略としての電子メディアビジネス

第3節 読者を満足させる新聞づくり

第4章 新聞とインターネットニュースの未来

第1節 紙媒体の行方

第2節 新聞はなくなるという主張

第3節 外的要因、他メディアによる侵略のシナリオ

第4節 未来予測本より

結論

おわりに

参考文献

主要参考文献

石坂悦男、桂敬一、杉山光信編『メディアと情報化の現在』(日本評論社、1993)

桂敬一、井上実子、鴫沢 哲雄、光森史孝「新聞の本領をいかに発揮できるか」『新聞研究』第550号(1997.5)

近未来の新聞像研究所『デジタル情報時代 新聞の挑戦～ジャーナリズムは生き残れるか』
（日本新聞協会研究所、1998）
石坂悦男、桂敬一、杉山光信編『メディアと情報化の現在』（日本評論社、1993）
土井 正「デジタル情報時代の新聞経営」『マス・コミュニケーション研究』第58号（2001）
日本新聞協会研究所編『2000年の新聞』（日本新聞協会研究所、1986）

インターネットに登場したニュース

テレビや新聞におけるニュースとの比較から

A9819030 松本亜夕美

インターネットの現状という、ウェブ上情報の流過程や、産業学的見方からの分析・傾向がよく述べられてきた。しかし、この論文の中ではマルチメディア化や IT の可能性に触れるにとどまらず、特に「ニュース自身の持つ力」に注目した。インターネットニュースの本質は、これまでのテレビや新聞を通して伝えられるニュースとどう違うのかということだ。人々のニュース意識はどのように変化してきているのか。

既存メディアをテレビと新聞に限定し、比較対象とした。これら既存メディア機関もインターネットを最大限に活用しようとしている。インターネットニュース登場によって、ニュースの役割を再考し、ニュースバリュー、ニュースを取り囲む環境やニュースの影響力について、ひとつずつ明らかにしていくことがこの論文の目的である。

論文は四章からなっており、全体の構成は次のようになっている。

はじめに

第一章 インターネットニュースとは何か

- (1) インターネットの誕生と WWW
- (2) インターネット初期からインターネット上ニュースへ
- (3) 日本でのインターネットニュースの現状

第二章 ニュースの特徴分析と利用状況

- (1) インターネットと既存メディアの特徴比較
- (2) インターネットニュースの潜在性と可能性
- (3) 利用状況、アクセスグループ

第三章 ニュースバリューの考察

- (1) インターネットニュースの種類と分析
- (2) 情報の受け手分析
- (3) ある1日の主要記事比較：新聞とニュースサイト
- (4) インターネットに登場したニュース：記事比較の結果から

第四章 影響力とニュースの持つ意味

- (1) ニュース環境の変化
- (2) 送り手と受け手のニュース意識変化
- (3) インターネットニュースのこれから
- (4) インターネットニュースの効果・影響力のまとめ

おわりに

参考文献

第一章では、インターネットニュースの現状までをまとめた。インターネットニュースをウェブ上でニュースを更新し続けているサイトと定義した上で、インターネットニュースの出現までを追った。インターネットが成立する上で、データベースとしての機能と世界観の共有という、二つの一見矛盾するかのような目的があったことに注目している。また、既存メディアへの不信感のあった時代の背景や、既存メディアのサービスの限界にも触れている

第二章は、ニュースと人を取り囲む環境や利用姿勢など、ニュースに影響を与える可能性を、外的要因を中心に探った。インターネットを既存メディアと特徴比較し表を独自に作成して、発信者の多様性、情報の多量性と多様性、双方向性、マルチメディア性、グローバル性、パーソナル性、受け手への到達度認知などの特徴を見出した。その他に、デジタル・ディバイドの出現やインフラ整備上の制約という新しい局面もある。総合的視野から、ニュース意識の変化を考えた。

また、インターネットニュースの利用状況をいくつかの図で示し、利用者層の分析や、ロジャーズによる革新性の普及についての研究を引用した利用者カテゴリー分析を行った。

第三章には、インターネットニュースを内側から観察した結果に言及した。ニュースの種類、新聞社系サイトの持つ意味、テレビの変化など私達の無意識的な変化などに触れた。1日を例に主要記事比較として新聞、新聞社系サイト、TVニュース専門チャンネルのサイト、プロバイダーサイトのニュースを取り上げた。その中で、各ニュースの価値観や優先度が見え、ニュースの内面的な構造が具体的に見えるようになったと思う。

第四章では、既存メディアとインターネットの比較から発展させたニュースバリューの議論を発展させた。インターネットニュースの潜在性と社会環境の変化をまとめ、これからの採用者に向けたアプローチの必要性和、送り手と受け手変化のためのアプローチも論じた。既存のニュース定義を持ち出し、新しいニュースの役割をできるだけ具体的にあげている。日本発の国際報道や News ML への動きなどである。

最終的には、ニュース役割の違いを明らかにし、インターネットニュースの潜在性と可能性から影響力が見えるようにしてきた。多メディア共存の姿勢と、メディアそれぞれが人と社会の中に位置を見出していくことが必要だとわかった。例えばニュースの本質を無視した商業性というように、多メディア化の中の問題がどこにあるのかをしっかりと見極めていくことの重要性を追求しようとしたのが、この論文の意図でもある。

主要参考文献

大石裕・岩田温・藤田真文著『現代ニュース論』有斐閣、2000

荻原滋編著『変容するメディアとニュース報道』丸善、2001

橋元良明・船津衛編『情報化と社会生活』北樹出版、2000

E.M.ロジャーズ著、青池慎一・宇野善康監訳『イノベーション革命』

Diffusion of Innovations、産能大学出版部、1990

猪狩淳一「ネット時代の記事利用を自在にする『News ML』」『新聞研究』No.594、2001年1月号

高田孝治「21世紀のメディア戦略」『新聞研究』No.594、2001年1月号

女性週刊誌における皇室報道 ジェンダーの視点からみる

A 9819045 三枝アキ

はじめに

第一章 皇室と女性の歴史

第一節 戦中天皇制国家と女性

第二節 戦後ミッチーブーム

第三節 メディア・イベントとしてのミッチーブーム

第四節 宮内庁とメディア

第二章 ジェンダーとは

第一節 ジェンダーとは

第二節 女性のライフスタイルの変貌

第三節 性による役割分担

第四節 「女らしさ」というジェンダー特性

第三章 女性週刊誌からみる雅子さま・紀子さまとジェンダー

第一節 『女性セブン』・『女性自身』・『週刊女性』

第二節 雅子さまご成婚報道と「女らしさ」

第三節 紀子さまご成婚報道と「女らしさ」

第四節 ご成婚報道と性的役割分担

第四章 結論

おわりに

参考文献

12月1日、新宮さまが誕生し、テレビ、新聞、雑誌などでもお祝いムードが続いている。過熱する報道が原因で雅子さまが流産したと批判されたため、今回は5月の懐妊発表以来、静かな報道雰囲気の中での出産となった。私も女性の一人として雅子さまの婚約、結婚、出産報道には関心をもって見ていた。

小和田雅子さまという非の打ち所のない女性が皇太子妃に選ばれ、親宮さまを出産されたことに祝福の気持ちもあったが、正直あれほどのキャリアをもった女性が家庭に入ることを残念に思った。外交官として働いていた頃のイメージとは対照的な、皇太子を支える控えめな印象の雅子さまを見ているとますますそう思うてしまう。

メディアは雅子さまや美智子さまなど女性皇族を中心に皇室報道をしているが、なかでも『女性セブン』、『女性自身』、『週刊女性』の三女性週刊誌では年間を通じて女性皇族を取り上げた記事を掲載している。これらの女性週刊誌は、女性皇族のファッションや仕草などをより女性らしく見えるように形容し、女性は控えめで優しいなどといった伝統的な女性像を強調して報道しているのではないかと考える。女性皇族の結婚生活を通して、女性は夫を支え、子供を産み育てるといったフェミニズムの流れに逆行した固定的な性別役割分担を正当化しているのではないか。

多くの女性が仕事もち、「個」として自立してきている時代の中で、女性週刊誌が美化され正当化された女性像を大量に流すことによって、世の女性たちが不平等な男女関係への不満を胸の内に潜ませてしまっているのではないだろうか。また、女性がこれに目をつぶり、我慢をすることで「男は仕事、女は家庭」という古い意識をもつ男性を優位にさせているのではないか。

そうした様々な疑問を解決するために、本論では、前述した三女性週刊誌がどのように

女性皇族を報道しているのかをジェンダーの視点から考えていく。

第一章では、これまで女性や女性皇族がどのように扱われてきたかを振り返る。戦中から史上最高の皇室報道といわれるミッチーブームまでを分析し、女性がどのように利用され、報道されていったのかを考える。つづく第二章では、ジェンダーとは、「女らしさ」というジェンダー特性とは、性別役割分担とは何かということを考えていく。

次に第二章で述べたジェンダー論を踏まえ、雅子さまと紀子さまのご成婚報道がどのようにされてきたのかを当時の『女性セブン』、『女性自身』、『週刊女性』の記事から分析し、これを第三章とする。それによって、両妃殿下がいかに「女らしさ」や「性別役割分担」を過度に強調され、報道されていったのかをみていく。第四章は結論とする。

結 論

これらの女性週刊誌は、女性皇族たちの容姿や服装や仕草などの外面的な美しさや女らしさを美化して報道し、また女性は世継ぎを産み育てるという性的役割を強調することで伝統的な女性イメージを増幅している。

例えば、婚約発表後の雅子さまの服装を表現する言葉として、「白」、「パステルカラー」などの色や、「優しい」、「初々しい」、「淡い」などの形容詞がキーワードとして頻繁に登場し、それによって伝統的な女性イメージが強調されている。これらの言葉は、独身時代の雅子さま報道の際には一切使用されていない。23歳の若さで学生結婚をした紀子さまも同じであり、この時には「上品」、「お嬢さま」、「さわやか」、「かわいらしい」という言葉を使用することで、男性に頼って生きていこうとする受動的な女性のイメージが強調されていた。

また、妃殿下たちがいかに料理や育児が好きであることを強調して報道することで、女性は家事をし、子供を産み育てるという固定的な性別役割分担を美化している。妃殿下たちが手料理を披露したり、子供と遊んだりしている写真やエピソードを掲載することで証明するのである。

高度成長期以降の女性の急激な社会進出によって、多くの女性が仕事と家庭という二重の負担を背負っている。この現状のなかで、女性イメージや性別役割分担を美化し、強調する女性週刊誌の記事が大量に社会に流れることによって、結果的には社会全体がこの男性優位な現実を受け入れることになる。それによって、女性は常に男性をたて、内で家庭を守るという伝統的概念が増幅し、さらには再生産されていくのである。皇室が女性週刊誌によってこのような報道をされている限り、男女間での本当の意味での対等な関係は望めないのではないだろうか。

主要参考文献

- 市川速水 『皇室報道』(朝日新聞社、1993年)
井上輝子 『女性学とその周辺』(勁草書房、1980年)
植田康夫 『『愛』と『やさしさ』の図像学』新聞学評論 No.40(1991年)
上野千鶴子 『近代家族の成立とその終焉』(岩波書店、1994年)
加納実紀代編 『女性と天皇制』(思想の科学社、1979年)
亀井淳 『皇室報道の読み方』(岩波ブックレット、1990年)
『皇太子妃報道の読み方』(岩波ブックレット、1993年)
軌跡社編集部編 『マス・メディア情報支配 - 天皇制というイデオロギー「装置」』(軌跡社、1990年)
津金澤聰廣 『近代日本のメディア・イベント』(同文館出版、1996年)
松浦総三 『マスコミの中の天皇』(大月書店、1984年)
村松泰子/ヒラリア・ゴスマン編 『メディアがつくるジェンダー』(新曜社、1998年)

目黒依子編『ジェンダーと社会学』(放送大学教育振興会、1994年)
『週刊女性』(主婦と生活社)/『女性自身』(光文社)/『女性セブン』(小学館)

外国メディアに見る日本のイメージ

タイのメディアは日本をどう伝えているか

A9819069 和田ひとみ

はじめに

第1章 ステレオタイプ

第1節 ステレオタイプとは何か

第2節 マス・メディアとステレオタイプ

第3節 日本のステレオタイプ

第2章 日タイ関係

第1節 日タイ略史

第2節 経済

第3節 人的交流・文化交流

第4節 タイの教科書にみる日本

第3章 タイのメディアにみる日本

第1節 タイのメディア事情

第2節 タイのマス・メディアが伝える「日本」

第3節 対日イメージ

第4章 イメージ形成におけるマス・メディアの役割

第1節 タイの事例から

第2節 マス・メディアの果たす役割

おわりに

近年、グローバル化が叫ばれ、さまざまな分野での国際化が進んでいる。個人や国同士、あるいは企業の進出など、外国との関わりも多様化している。そして、マス・メディアの著しい発達により、外国の情報も、かなりの量を自国にいながらにして手に入れることができるようになった。

ところが、日本や日本人は外国から誤解されていることも多い。経済一辺倒のイメージ、「サムライ」「ゲイシャ」といったような伝統的なイメージ、あるいは戦時中の日本軍の残虐なイメージをそのまま現代の日本に重ね合わせている場合もある。

どうして同じ「日本」「日本人」が、国によって異なったイメージをもたれるのか。

それは各国で日本に関する情報を伝えているマス・メディアの影響もあるだろう。しかし、マス・メディアが日本のイメージをゼロから作り出しているわけではあるまい。日本のイメージとは、その国と日本がどのような関わりをもってきたか、そして現在どのように関わっているかということが影響して形成されていくはずだ。

そこで、日本と古くから関係をもってきたアジアの国のなかで、戦時中に侵略・被侵略の関係がなかったことから比較的親日的といわれ、日本に関する情報も多く伝えられているタイ国を例にとり、外国のイメージ形成においてマス・メディアがどのような役割を果

たしているのかをみていく。

第1章では、ステレオタイプとはいったい何であるか、マス・メディアとステレオタイプの関係、そして諸外国の対日ステレオタイプについて述べている。第2章では、タイと日本の過去、現在における関係をさまざまな観点から調べ、日本イメージに結びつく要因を探った。第3章では、タイのテレビや新聞がどのように日本を伝えているか、対日イメージはどのようなものかを、先行研究を参考に述べた。最後に第4章では、タイと日本のさまざまな関わりがどのように国民がもつ対日イメージに影響するのか、メディアはそこにおいてどのような役割をもっているのかを検証した。

主要参考文献

- 綾部恒雄編著『外から見た日本人』朝日新聞社、1992年。
 川竹和夫『異文化のなかのニッポン』二期出版、1991年。
 川竹和夫他編著『メディアの伝える外国イメージ』圭文社、1996年。
 高橋順一他編『異文化へのストラテジー』川島書店、1991年。
 渡辺文夫編『異文化接触の心理学』川島書店、1995年。
 Lippmann, W., *Public Opinion* (New York: Macmillan Co., 1922)
 掛川トミ子訳『世論』岩波書店、1987年。

メディアとプロレス

A 9819072 山下康幸

はじめに

- 第一章 テレビとプロレスの誕生
 第一節 テレビの誕生
 第二節 プロレスの誕生
 第三節 街頭テレビ
 第二章 プロレスの発展期から現在まで
 第一節 新日本プロレスと全日本プロレスの誕生
 第二節 発展期から現在までのプロレス放送
 第三章 スポーツに対するメディアの影響
 第一節 プロレスはスポーツか
 第二節 メディア・イベントとしてのスポーツ
 第三節 メディア・イベントとして的高校野球
 第四節 プロレスと高校野球の比較

第四章 まとめ

おわりに

参考文献

はじめに

2001年10月8日に東京ドームでおこなわれた新日本プロレスの興行に、プロレスリング・ノアの秋山準が出場した。メイン・マッチで永田祐志とタッグを組み、武藤敬司・馳浩組と対戦した。これまでアントニオ猪木の新日本プロレスとジャイアント馬場の全日本

プロレスは交わってこなかったし、これからも交わることはないと思われていた。だが、永田、武藤、馳（現在は全日本プロレス所属）という新日本プロレスのトップレスラーと秋山という全日本プロレスの本流を受け継いだプロレスリング・ノアのトップレスラーがはじめて交わり、さらに永田と秋山はタッグを組んだ。

永田と秋山の出会いは、2001年3月2日におこなわれた ZERO-ONE の旗揚げ興行である。新日本プロレスを解雇された橋本真也が ZERO-ONE を立ち上げて、両国国技館で旗揚げ興行をおこなった。そのときのメイン・マッチが橋本・永田組対三沢光晴（プロレスリング・ノア）・秋山組である。このときに永田と秋山はお互いのファイトに感銘を受け、いずれはタッグを組み、そして闘おうと誓った。だが、それは誰もがかなわぬ願いだと思っていた。

その原因は、プロレス界やプロレス・メディア、プロレスファンなどの、いわゆる「プロレス村の住人たち」(閉鎖的なプロレス界、マニアな気質を持ったファンが多いことからこう称される)のあいだで公然と語られる「テレビ問題」である。そもそも新日本プロレスはテレビ朝日、全日本プロレス（現在はプロレスリング・ノア）は日本テレビが放送していて、放送局の許可が無い限りは他局が放送するマットでは試合が出来ないのである。2000年に現在の全日本プロレスが新日本プロレスのマットで試合をしたが、このときは全日本プロレスと日本テレビの契約は打ち切られていたから何の問題もなく実現した。ZERO-ONE で三沢と秋山が試合をしたときはさまざまな問題が起こったが、ZERO-ONE の放送がCS のスカパーフェク TV だったことと、その試合を日本テレビが放送することを条件に試合が許可された。

だが、秋山が新日本プロレスで試合をすることはあまりにも障害が大きいと思われていた。新日本プロレスとプロレスリング・ノアはプロレス界の二大巨頭であるし、両団体とも地上波の放送局がついている。だが結局、テレビ朝日と日本テレビの話し合いによって秋山の試合は許可され、プロレス界の歴史に残ることとなった。

私はプロレスが好きになってまだ2年程度だが、常々この「テレビ問題」には疑問を感じていた。テレビの力があまりにも強くなりすぎて、プロレスというスポーツ活動を阻害しているのではないだろうかという思いがこの論文の執筆動機である。

第一章ではテレビとプロレスの誕生期について研究し、おもに街頭テレビによるプロレス中継を検証する。第二章では新日本プロレスと全日本プロレスに分裂し、「レスリング・ウォー」の時代のプロレス放送について考える。第三章ではメディア・イベントとしてのプロレスについて研究し、第四章で論文の結論を出す。プロレスにテレビは悪影響を及ぼしているという仮説のもとに、この論文の執筆を進めていく。

主要参考文献

- 朝日新聞社 『100人の20世紀・上』(朝日新聞社、1999年)
有山輝雄 『甲子園野球と日本人』(吉川弘文館、1997年)
井上俊・亀山佳明編 『スポーツ文化を学ぶ人のために』(世界思想社、1999年)
猪瀬直樹 『欲望のメディア』(小学館、1990年)
江刺正吾・小椋博編 『高校野球の社会学』(世界思想社、1994年)
NHK 編 『放送の五十年』(日本放送出版協会、1977年)
大野晃 『現代スポーツ批判』(大修館書店、1996年)
岡村正史・川村卓 『超時代的プロレス闘論』(三一書房、1998年)
亀山佳明 『スポーツの社会学』(世界思想社、1990年)
鈴木守・山村理人編 『現代文化としてのスポーツ』(道和書院、2000年)
鈴木守・山村理人編 『現代文化としてのスポーツ』(道和書院、2001年)
多木浩二 『スポーツを考える』(筑摩書房、1995年)

- 津金澤聰廣『近代日本のメディア・イベント』（同文館出版、1996年）
中村敏雄『スポーツの見方を変える』（平凡社、1998年）
橋本一夫『日本スポーツ放送史』（大修館書店、1992年）
日高一郎『日本の放送のあゆみ』（人間の科学社、1991年）
広瀬一郎『メディアスポーツ』（読売新聞社、1997年）
マイケル・R・ボール著、江夏健一訳『プロレスの社会学』（同文館出版、1993年）
松村友視『合本 私プロレスの味方です』（筑摩書房、1994年）
ほか『東京スポーツ』、スポーツ関係雑誌多数